

## 彩画鏡の変遷とその意義

宮本, 一夫

<https://doi.org/10.15017/1854979>

---

出版情報 : 史淵. 137, pp.159-191, 2000-03-10. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :

## 彩画鏡の変遷とその意義

宮 本 一 夫

### 一 はじめに

かつて戦国鏡の分類と編年について述べたことがある<sup>①</sup>。そこでは戦国鏡の鏡式の一つである透彫二重体鏡や彩画鏡について十分に触れることがなかった。どちらも数量がわずかであることとともに、複雑な文様構成からその編年的な位置づけが難しいことによる。近年では年代の分かる出土資料が増加し、透彫二重体鏡については廣川守による詳細な編年案が示されている<sup>②</sup>。しかし彩画鏡についてはその体系的な位置づけがなされていないのが実状である。しかも彩画鏡は前漢までその系譜が続き、戦国式鏡から漢式鏡が生まれる時期の作鏡体系を明確に物語っている。さらには前漢の彩画鏡は福岡県前原市三雲南小路一号甕棺からも出土しており、我が国にもたらされた中国鏡の中では最も古いものである。こうした鏡がいかなる経緯で伊都国にもたらされたであろうか。まずは、戦国鏡における彩画鏡の位置づけを試み、彩画鏡の変遷を明らかにしたい。さらには前漢における彩画鏡の意味を考えることにより、ひいては三雲南小路一号甕棺出土彩画鏡の意味を考えてみたいのである。

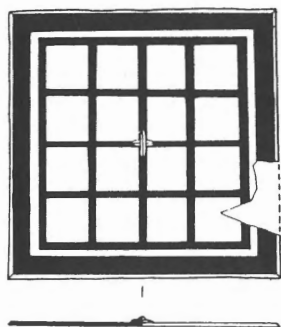


とごく数が限られている。また、美術館所蔵品には贗物の可能性の高いものもあり、実際に資料として扱えるものはさらに数が限られてくる。さて彩画鏡とは鏡背に彩色を施して文様が描かれるものであり、戦国鏡において特異な鏡式である。文様部分は彩色されているため、保存状態が悪ければ剝落し現在に残らない。あるいは剝落によつて文様が残りにくいと言ふことがいえよう。したがつて素文鏡として報告されているものの中にも本来彩画が施されていたものが存在する可能性も高いし、あるいは彩色が施された痕跡は確認できても文様構成がよくわからないものも存在する。彩画鏡を分類するにあつては、彩画部分の文様構成から分類を行うよりも、まず鏡の断面形を含めた鏡本体の形態から分類する方が効果的である。しかもこの鏡の形態による分類は、戦国式鏡における作鏡の系譜を考えるにあつて有効であり、戦国式鏡全体の中での彩画鏡の位置づけが可能である。

彩画鏡の形態からの分類は大きく四型式に分かれる。小型で平面形が方形をなす方鏡であるA式。A式は縁が七面を形成しない平板な青銅板からなつている。A式以外はすべて平面円形をなす円鏡である。B式はA式同様縁に七面をもたない平板な円形の青銅板から成るものである。C式は縁が七面をなすタイプの鏡である。C式は七面の形態あるいは圈帯の配置状態によりさらに細分が可能であり、少なくとも三型式に細分できよう。この細分案については後に詳述する。D式は平縁で周縁が連弧形を呈するものである。次にそれぞれの型式を具体的な事例から眺めて行きたい。

## (一) A式鏡

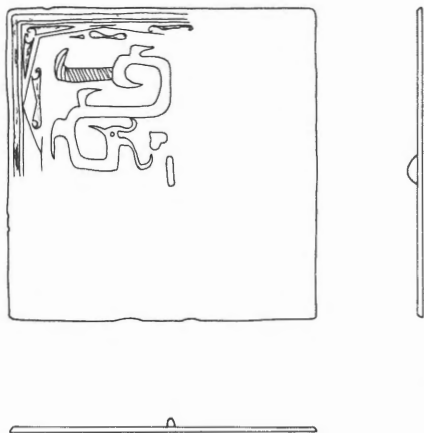
湖北省江陵望山一号墓<sup>(4)</sup>、湖北省江陵九店二三四号墓<sup>(5)</sup>、黒川古文化研究所蔵<sup>(6)</sup>、京都国立博物館所蔵<sup>(7)</sup>に認められる(図1)。望山一号墓鏡は黒漆を地に施した上に紅漆で幾何学文が描かれている。江陵九店二三四号墓のA式鏡は、黒漆地に朱彩による方格文が描かれている。黒川古文化研究所蔵鏡は朱で葉形や渦文の輪郭を描き、その中を青



1 江陵九店 234 号墓 (縮尺 1/2)



2 黒川古文化研究所蔵鏡



3 京都国立博物館蔵鏡

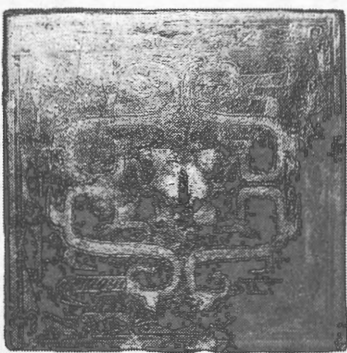


図1 彩画鏡A式

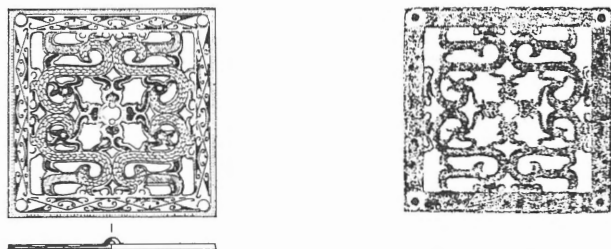


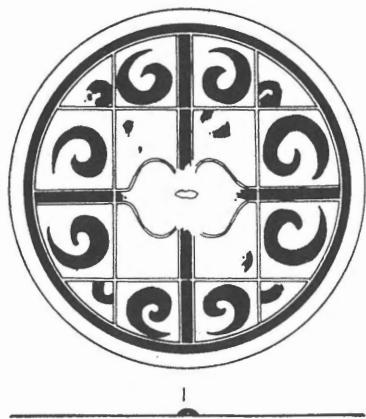
図2 包山2号墓出土透彫二重体鏡

色で充填した幾何学文をなす。ともに幾何学的な文様構成がなされる。以上の幾何学文様からなるものをA1式とする。これに対し、京都国立博物館所蔵のものは相対する鳳身が紐を挟んで対称に配置され、周縁には卷雲文が描かれるものである。鏡体そのものは白銅質を呈しているが、鏡背はまず茶褐色の漆地に文様が描かれる。鳳身は朱で輪郭線が描かれ、内部を黄色で埋めている。こうした具象文様が描かれるものをA2式とする。この京都博物館蔵鏡にきわめて類似した文様構成が、湖北省荆門市包山二号墓の透彫二重体鏡(図2)に認められる<sup>(8)</sup>。周縁の卷雲文もよく類似しているが、京都国立博物館蔵鏡の方がより簡略化した感じがする。

(2) B式鏡

河南省信陽長台関一・二号墓<sup>(9)</sup>、湖北省荆門市包山1号墓<sup>(10)</sup>、湖北省江陵望山四号墓<sup>(11)</sup>、湖北省江陵九店七七・五一四・五七一号墓出土鏡や白鶴美術館蔵あるいは村上英二氏蔵に認められる<sup>(12)</sup>。七面の縁をもたない平板な銅板から成り、橋状把手をもつものである。主文様の文様構成から大きく二種類に分けることができる。雲文などの抽象的文様が対照的に配置して描かれるものと、鳳凰文や龍文から成る具象的な文様構成が描かれるものである。前者をB1式、後者をB2式とする。

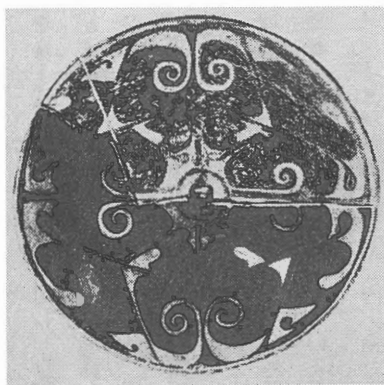
B1式(図3)は、長台関一号墓(一一六九、一一二九)、長台関二号墓



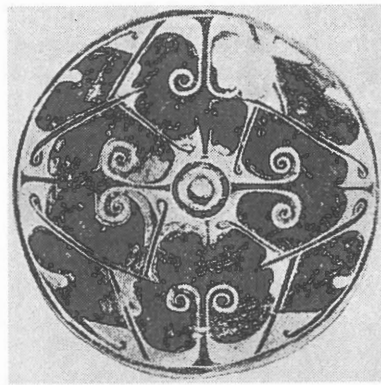
1 江陵望山4号墓



2 信陽長台関2号墓



3 信陽長台関1号墓 (1-69)



4 信陽長台関1号墓 (1-129)

図3 彩画鏡B1式

(二二二一九一) や望山四号墓出土鏡が相当する。これらの直径は九・八〜十四cmとB式の中では比較的小型である。

B2式(図4)は、鳳凰文が絡み合いながら三つ配置される長台関二号墓鏡(二二二一九一)と、鳳凰文と龍文から成るものに大きく分かれよう。後者の場合は、包山一号墓鏡は紐に対して点対称の二つの鳳凰文と点対称の二つの龍文からなる。さらに周縁に卷雲文が描かれている。江陵九店七七号墓鏡は、文様そのものの具象性が包山一号墓鏡に比べ簡略化しており、輪郭線を主体に描かれている。文様構成は鏡の中心に鳳凰文が描かれ、点対称的に二つの龍文が描かれている。周縁の卷雲文は包山一号墓鏡のそれに比べさらに簡略化した文様構成といふことができる。文様構成的に言えば、包山一号墓鏡から江陵九店七七号墓鏡へと変化したものと想定できる。さてこうしたB2式鏡に属すると考えられるものが白鶴美術館に所蔵されている(図5)が、残念なことに文様の剥落が著しく文様構成の把握が難しい。断片的に確認できる文様から復元的に推測するならば以下のようなう。白鶴美術館一号彩面鏡は点対称の鳳凰文と周縁に卷雲文が描かれているところから、包山一号墓鏡に類似していると考えられるが、龍文が存在するかは不明である。しかし直径は包山一号墓鏡よりやや大きいところからいえば、これと同様の文様構成からなる可能性が高いであろう。白鶴美術館二号彩面鏡は三単位文様からなり、鳳凰文の尻尾に相当する部分が確認できるところから、長台関二号墓鏡に類似した三鳳凰文鏡である可能性が想定できる。なお白鶴美術館一・二号鏡とともに白銅質を呈している。

### (3) C式鏡

C式鏡は戦国式鏡の特徴を示す七面を縁形とするものである。嘗て戦国鏡の編年を考えたことがあるが、その際の縁の断面形で定義した縁D類がこれに該当している。しかし一般的な縁D類に比べ周縁の幅が広く縁の高さ

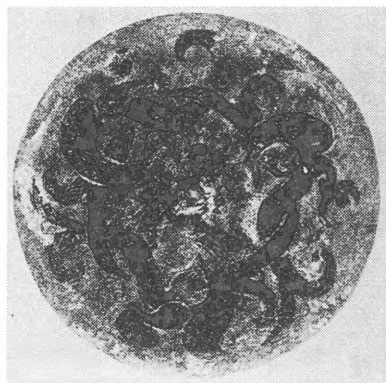




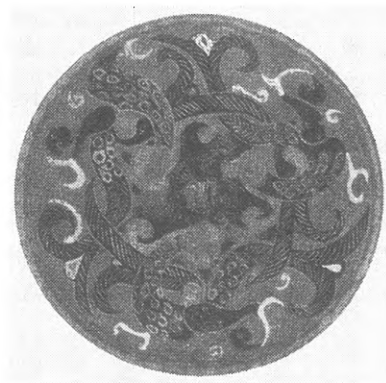
1 包山1号墓



2 江陵九店77号墓

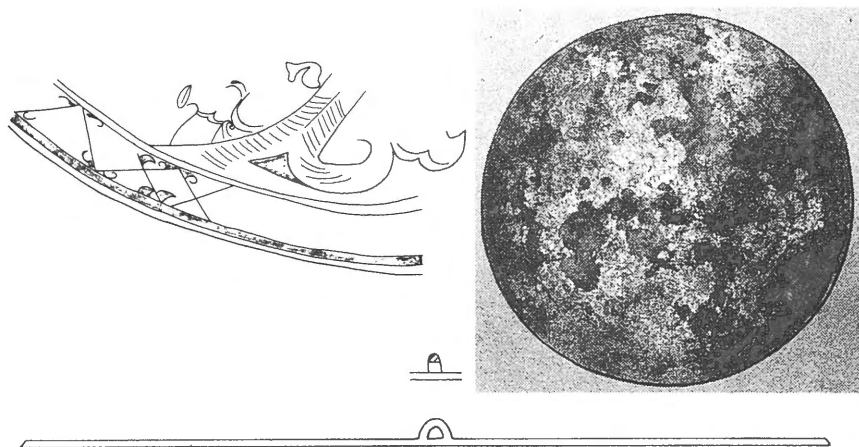


3 信陽長台関2号墓

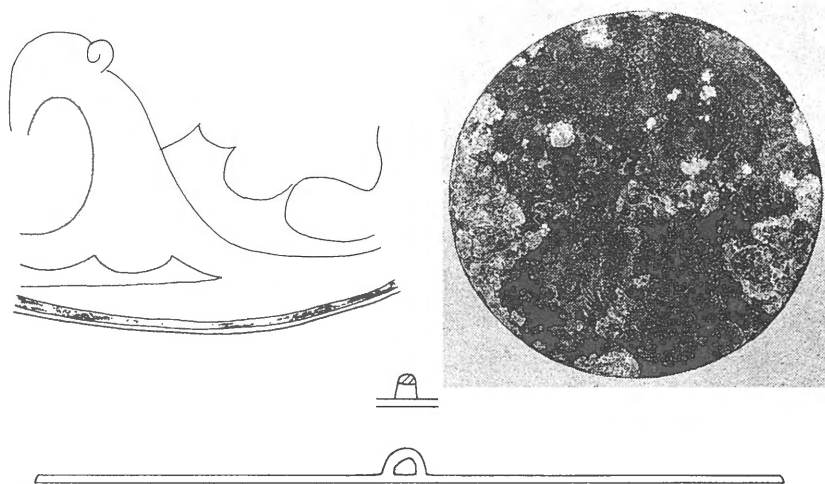


4 信陽長台関2号墓（復原図）

図4 彩画鏡B2式



1 白鶴美術館蔵1号鏡 (断面図縮尺1/2)



2 白鶴美術館蔵2号鏡 (断面図縮尺1/2)

図5 彩画鏡B2式

が突出するものであり、一般的な縁D類を縁D1類とした場合、この縁が突出したものを縁D2類と区分できる。<sup>15</sup> C式鏡は縁D2類を特徴とするものである。<sup>16</sup> C式鏡は圏帯の有無やあるいはその圏帯が一重あるいは二重に巡るかにより、三型式に細分することが可能である。

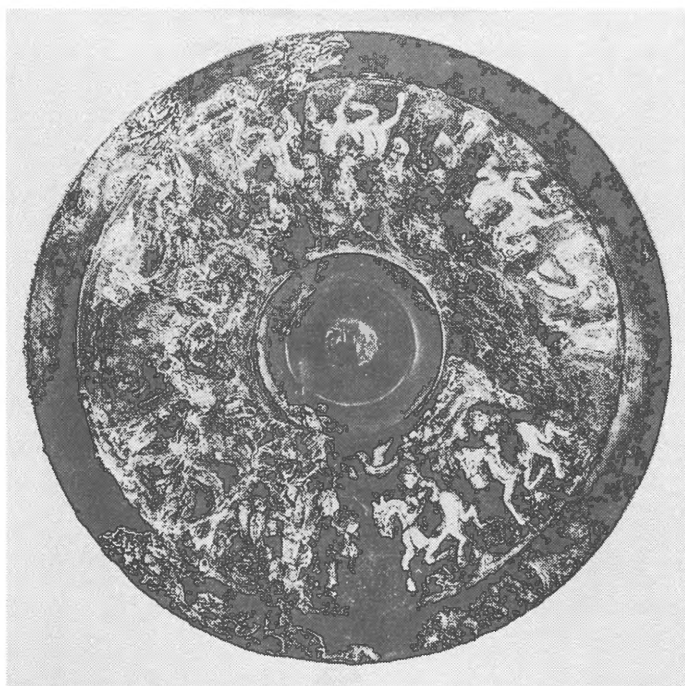
C1式は圏帯をもたないものであり、伝洛陽金村出土とされる九弧文彩画鏡一面のみである(図6-1)。梅原末治によれば彩色が施されることが指摘されているものの、具体的な文様構成は不明である。またガラスの象嵌も施されているとされる。

C2式は一重の圏帯をもつものであり、ギメー美術館蔵鏡<sup>18</sup>が相当する(図6-2)。この文様構成は人物像が題材となっている。四面の人物像あるいは騎馬人物像が紐方向に求心的に配置して描かれている。こうした人物像はC2式やC3式あるいはD式に共通した文様図柄となっている。その他C2式の可能性のあるものとしてD.H. Graham氏収蔵<sup>19</sup>のものがあるが、明確な文様構成が不明であることから、ここでは取り上げないこととする。

C3式(図7・8)はハーバード大学美術館蔵鏡<sup>20</sup>、南越王墓西耳室出土鏡<sup>21</sup>(C二一三)、東京国立博物館蔵鏡(旧守屋氏蔵鏡<sup>22</sup>)、白鶴美術館蔵三号鏡に認められる。ハーバード大学美術館蔵鏡は、縁と紐座の間を圏帯によって区切られ、外区と内区に彩画が施される。その他の鏡はすべて圏帯が二重に配置されており、圏帯によって区切られた外区と内区にそれぞれ彩色文様が描かれるものである。このように縁D2類でありながら、圏帯を挟んで内区と外区に文様帯を分ける彩画鏡をC3式とする。ハーバード大学美術館蔵鏡と東京国立博物館蔵鏡は、共に外区の主文様に人物像を、内区に雲気文を描くものである。南越王墓西耳室出土C二一三鏡は、外区文様が四葉巻雲文式花卉文と特異であり、内区は雲気文が描かれる。白鶴美術館蔵三号鏡は実際には圏帯が二重に鑄出されていない平板なものであるが、その代わりに圏帯部分を彩色によって描いており、文様構成上同じことであるところから、ここではC3式鏡に含めて分類しておく。白鶴美術館蔵三号鏡の場合、外区、内区ともに数種類の鳳身



1 伝洛陽金村出土鏡（彩画鏡C 1式）



2 ギメー美術館蔵出土鏡（彩画鏡C 2式）

図6 彩画鏡C 1・C 2式



1 ハーバード美術館蔵鏡



2 東京国立博物館蔵鏡 (断面図縮尺1/2)

図7 彩画鏡C 3式

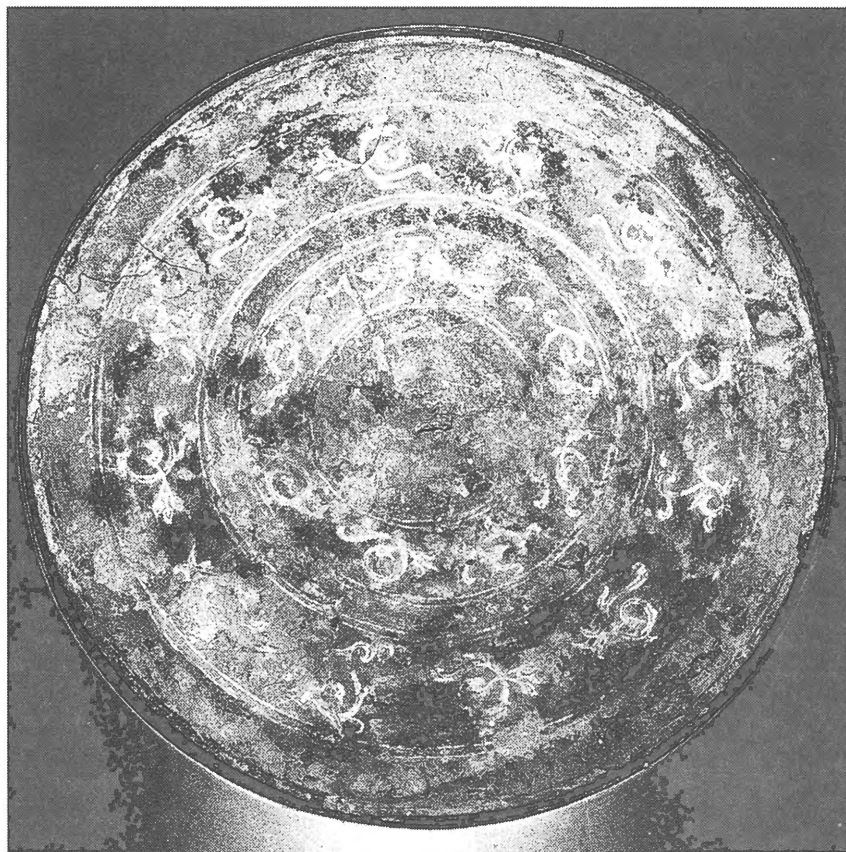
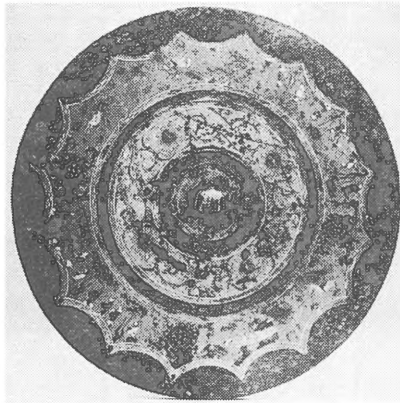


図8 彩画鏡C 3式（白鶴美術館蔵3号鏡、断面図縮尺1/2）



1 南越王墓西耳室(c 145-73)縮尺1/8

2 石寨山3号墓(縮尺1/8)



3 西安市紅廟坡(断面図 縮尺1/3)

図9 彩画鏡D式

が描かれている。

(4) D式鏡

戦国式鏡の縁形分類F類に相当するD式鏡(図9)は、西安市紅廟坡出土鏡<sup>(23)</sup>、南越王墓西耳室出土C一四五一七三・C一七一鏡、南越王墓東側室、雲南省晋寧石寨山三号墓出土鏡<sup>(24)</sup>に認められる。これらは外区と内区に彩色文様が施されることに特徴がある。石寨山三号墓と南越王墓西耳室出土三号鏡の場合、内外区の文様は存在するがその文様構成はよくわからない。紅廟坡出土鏡、南越王墓西耳室C一四五―七三鏡の場合、外区文様はともに人物像であり、内区は雲氣文が描かれる。D式鏡は面径が二七cm以上で、最も大きい南越王墓西耳室出土C一四五―七三鏡が直径四一cmと特大であるなど、D式鏡は大型であることに特徴が認められる。また縁の厚さが三―五mmと厚く、連弧縁と鏡面との段差がほとんどないことが断面図からも示されるように、鏡面の厚さが他の鏡式に比べて極めて厚い特徴が認められる。これはD式鏡が大型鏡であることと相関している特徴であろう。

なお、このほか出光美術館蔵鏡<sup>(25)</sup>や明治大学考古古博物館蔵鏡<sup>(26)</sup>などに彩画鏡が知られるが、その彩画された文様意匠など類例が知られないものであり、かつ後世の文様意匠に近いところから、贋物の可能性もあり、ここでは検討の対象とはしない。

三 三雲南小路一号甕棺出土彩画鏡の復元

我が国で唯一出土した彩画鏡は、福岡県前原市三雲南小路一号甕棺墓出土鏡である。この一号甕棺からは併せて三五面の前漢鏡が出土したとされる。その一面がこの彩画鏡である。江戸時代に出土した際に記録された青柳



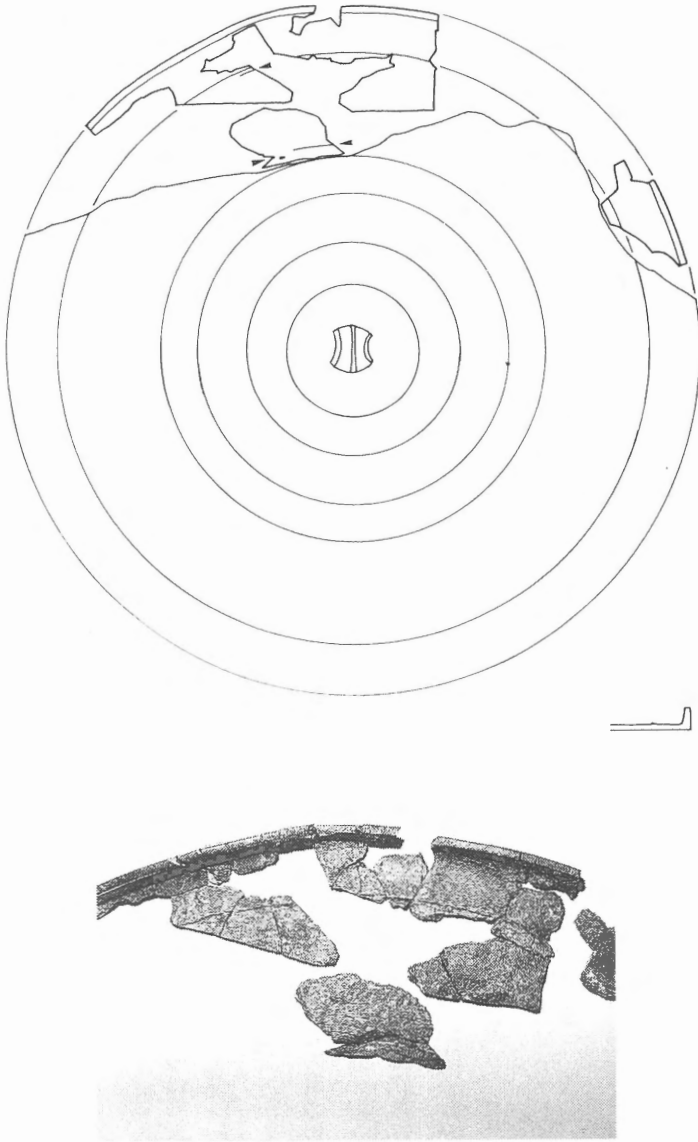


図10 三雲南小路1号甕棺出土彩画鏡（図面縮尺1/3）

種信の『柳園古器略考』によれば、「其ノ大なるは徑り九寸。背文なし」と記されている。一九七五年の福岡県教育委員会の発掘調査により、三雲南小路一号甕棺の位置が確認され、さらに二号甕棺が調査されている。この際一号甕棺付近から彩画鏡の断片が出土し、この鏡が彩画鏡であることが判明した。新たに出土した鏡片からは、この鏡が縁形D2類である彩画鏡C式であることを明瞭に示している。しかも青柳種信の記録から判断すれば、鏡背に二重の圈帯を有しており、明らかに彩画鏡C3式の特徴を示している。再調査によって発見されたこの鏡の鏡片からは、図10に示すような配置が想定できる。復元直径は青柳種信の記述により二七・三cmと考えられており、文様の配置や面径からしても東京国立博物館蔵鏡に最も類似している。鏡片の観察からは、鏡背の外区には漆地を施して彩画面を安定させてから朱彩による文様地が施されている。そこにかすかに残る白く細い線が縁に沿って認められるとともにその反対の紐側にも弧形の細い白線(図10の矢印部分)が認められる。青柳種信の記録画から判断してこの紐側の白線は重圈帯に沿う白線と判断される。しかもこの白線に沿うように重圈帯側に細かな菱形の白い点が認められる。これは、ハーバード大学美術館蔵鏡や紅廟坡出土鏡の同じ場所にもみられる菱形の4点からなるものの一部であると判断される。東京国立博物館蔵鏡の場合、重圈帯に沿って白線を伴い、外区は同じように朱彩を文様地としていることから、南小路一号甕棺出土彩画鏡は東京国立博物館蔵鏡に類似したもの可能性が高いであろう。

#### 四 彩画鏡の変遷とその位置づけ

これまでの彩画鏡の型式分類によって示したA式・B式は、その形態からも素文鏡の系統を引くものであり、出土した墓葬の年代からも戦国後半期に収まるものである。何よりもA・B式鏡はすべて楚墓から出土している

ことから、こうした鏡が楚の独特な鏡と考えるべきであり、楚において独自生産されたものと考えられる。楚の典型的な鏡である羽狀獸文地獸形鏡のうち、湖南省長沙筮笠坡七四号墓出土のものには、縁に菱形文が朱彩されており、この例からも彩画鏡と楚との関わりが深いことが理解できよう。A式鏡の内、幾何学文からなる望山一号墓A1式鏡は、墓葬年代前四世紀第三四半期であり、前四世紀中葉頃の鏡である。またA2式鏡の京都国立博物館蔵鏡は文様構成上、廣川守の二重体鏡の分類にみられる鏡面はめ込み型方形平彫<sup>28</sup>式鏡に類似している。これらは湖北省包山二号墓出土鏡、湖北省郭店一号墓出土鏡や河南省洛陽西工区出土鏡<sup>29</sup>であるが、京都国立博物館蔵鏡の鳳身文様やその文様配置、あるいは周縁の卷雲文など、非常に類似した文様構成をとっている。さらにこれらの二重体鏡には黒漆を塗った上に紅色あるいは黄色の彩色が施されたり朱漆で文様が施されるなど、彩画鏡と同じ技法が認められる。したがって年代的にも近いということができ、京都国立博物館蔵鏡は包山二号鏡に最も近いものであり、前三〇〇年前後の鏡であると考えられる。さらにこれらの彩画鏡と二重体鏡には生産技術の共有が認められ、同一系統の工房で生産されたと考えられるのである。とともに望山一号墓A1式鏡の事例からも、抽象文から具象文へという時期差が存在する可能性がある。さて、抽象的表現の彩画鏡B1式は長台関一・二号墓にも認められるように、戦国中期の前四世紀中葉を最も古いものとすることができる。これに対し具象的な彩画鏡B2式は、包山一号墓の墓葬年代が前四世紀第四半期であることから、B1式鏡に比べて若干遅れて出現した可能性がある。また、B2式鏡の内、長台関二号鏡のような三鳳凰文が絡み合った文様構成は、文様意匠そのものの類似はないものの、三つの龍文様を同一方向に絡ませる鏡面はめ込み型彫彫形鏡一式などに類似しており、二重体鏡との関連も連想できる。また同じ楚の前三世紀前半に比定される江陵馬山一号楚墓出土奩蓋<sup>30</sup>の三鳳凰文の文様構成や意匠が彩画鏡B2式のものと同様しており、共通の生産基盤や年代関係を想定できるのである。

ともかくA・B式鏡は戦国時代後半期に楚国を中心に製作されていた特殊な鏡として位置づけることができ、さらに二重体鏡との製作技術上の関連と製作工房の系統的な関連が推定できるのである。その意味では、京都国立博物館蔵鏡や白鶴美術館蔵一・二号鏡が白銅質であることは、透彫二重体鏡の鏡面側が白銅質であるという傾向と同じ特徴を示しており、二つの鏡の類似性とともにその作風の類似性を改めて示していると言えよう。またA・B式においては、抽象文のA1・B1式が先に出現し、その後具象文が描かれるA2・B2式が出現した可能性がある。

以上の二重体鏡と彩画鏡A・B式の類似性の上にさらに注意せねばならないのが、それらの製作年代である。二重体鏡の生産が前四世紀代にほぼ終焉しており、ほぼその時期から彩画鏡A・B式の生産が始まることは興味深い。二つの鏡式の製作技術や文様意匠の類似性は同一工房の生産であることを暗示するものである。しかし年代的にみてその二つの鏡式の製作年代が連続するものであることから、二重体鏡の後にそれに変わるものとして彩画鏡の生産が盛んになったものと考えることができる。

C式・D式は縁形D2類・F類からなる鏡であり、私の戦国鏡編年の第六段階以降に出現する型式である。戦国鏡編年第六段階は前三世紀第四半期と考えており、上記した彩画鏡A・B式よりも新しい段階の鏡である。彩画鏡C1式に関しては連弧文鏡2式として戦国鏡編年第五段階以降に位置づけできるが、地文を持たない点では連弧文鏡1式に類似しており、戦国鏡編年第六段階以降に位置づけるべきである。彩画鏡C1・C2式に対して、彩画鏡C3式は紐座と縁の間に圈帯を配置することにより外区と内区を分ける文様構成を意図しており、戦国鏡編年第六段階以前には存在しない新しい文様構成要素である。その意味では彩画鏡C3式が前二世紀代すなわち前漢代に製作された鏡であると想定できるのである。彩画鏡C2式・C3式ともに人物文や車馬文からなる画像文様を伴っている。こうした人物車馬文様は戦国楚の漆器文様などに類例がみられるが、戦国鏡にはこういっ



図11 徐州宛胸侯劉執墓（縮尺1/2）

た文様は認められない。類似した文様として挙げられる人物画像鏡（図11）は江蘇省徐州市宛胸侯劉執墓<sup>32</sup>から出土している。

この墓の被葬者は前漢景帝三年（前一五四年）あるいはそれよりやや新しい段階に埋葬されたものと考えられており、この鏡の製作年代は当然この埋葬年代より古い段階のものと考えられる。この人物画像鏡は地文が私の分類の地文G類に相当している。地文G類は秦始皇帝兵马俑坑一号坑出土の銅甬鐘に認められるところから、前二〇〇年前後以降に認められる文様である。また縁形D2類や紐が亀形を為すところも、戦国鏡第六段階以前にはみられない要素である。

したがってこの鏡は前二世紀前半の鏡であると位置づけできる。ところが彩画鏡の人物画像文との最も大きな違いは、この人物画像鏡の場合四単位の文様が同じであるのに対し、彩画鏡C式の場合、四単位の文様がそれぞれ異なることにあり、この意味では楚の戦国漆器の文様構成に近いものがある。したがって、彩画鏡C式は縁形D類の系統からも戦国鏡の楚式鏡の伝統を引くものであり、人物車馬図の文様構成を楚の漆器文様、例えば包山二号墓の奩の文様と関係づけるならば、基本的に楚の伝統的な作鏡技術の流れを引くものと考えられる。事実戦国時代における彩画鏡は楚の作鏡システムの中に生まれたものであり、その技術の流れの中に彩画鏡C式が漢代に生まれたものと考えられるのである。また彩画鏡D式の縁形F類は、系統的には華北の細地文鏡の系統を引く鏡である。戦国鏡第六段階における蟠螭文鏡が作鏡系統的に言えば、華北の細地文鏡と華中の羽状獣文地鏡の融合の内に生まれたものであることを示したことがあるが、この彩画鏡D式の縁形にみられる細地文鏡の伝統とともに彩画技術という楚の作鏡の伝統が融合したものであり、まさに統一秦期以降の作鏡様式といえることができる。その意味で彩画鏡C3式に含めた白鶴美術館蔵三号鏡は、縁形を含めた鏡の形態や彩画技術という楚の伝統的な作鏡様式とともに、そこで描かれた鳳身文のモチーフは細地文鏡の文様モチーフに元をたどることができる。あるいは統一秦期以降に出現した秦の南郡における漆器文様に類似しており、やはり秦との関係で捉えなければならぬであろう。その意味でも、彩画鏡C式・D式は華北と華中の融合の基に生まれた鏡ということができ、前漢初期の様式的なあり方をよく示していると言える。新しく出現した人物車馬図の意匠と人物画像鏡との関係から考えれば、彩画鏡C・D式の大半は前漢前葉すなわち前二世紀前半に製作されたものと考えられる。また彩画鏡C式とD式を比べた場合、彩画鏡D式は鏡面が厚くなっている。これはD式の大型化とも関連しているが、鏡面が厚くなる様式的な傾向は前二世紀中葉から前2世紀後半の特徴と考えられる。<sup>35</sup> こうした様式的な傾向からは、大きくいって彩画鏡C式からD式といった変遷が想定できよう。

さらに年代的な位置づけとして注目すべきは、彩画鏡C式とD式がともに出土した南越王墓の被葬者の年代である。この被葬者に関しては前一二二前後に亡くなった趙昧と推定されるのが一般的である。趙昧は第一代の南越王である趙佗を引き継いで在位わずか一六年でなくなった第二代の南越王である。史書には趙胡と記されているものが趙昧にあたる。初代の趙佗は秦の敗北に機を乗じて独立した政権であり、独立時には漢との関係を絶つていた。第二代の趙昧の墓である南越王墓の特徴は、出土した銅鏡が三九面と非常に多いのと同時に型式的には多数の戦国鏡を含んでいることにある。前漢に属するものとしては彩画鏡や帯托鏡などごく僅かな鏡式が認められる。また鏡式的に前二世紀後半の鏡式である草葉文鏡や蟠螭文鏡2・3式<sup>36</sup>が認められない。漢初に独立した南越の趙佗は呂后の時には長沙において漢と戦闘を交え、漢との実際上の関係をもつていなかった。南越国が漢との関係を再びもつたのは、文帝元年（前一六九年）に文帝の使者陸賈の訪問によって南越の趙佗が漢の外臣であることを認めて以降であろう。しかし本格的な漢式系文物がこの地に流入するのは、前一一一年に南越が滅び漢による直接支配が始まってからであろう<sup>37</sup>。南越王墓において戦国鏡が圧倒的に多数であるというのは、こうした対漢との関係を反映しており、いわば独立政権下における鏡の供給状況に関係しているのである。被葬者である趙昧の没年は前一二二年前後であるものの、そこに納められた鏡は対漢との関係が修復する以前の鏡に限られているとすることができないのではないだろうか。いわば趙佗の段階に旧楚領域との関係で入手した鏡あるいはこの地域での自己生産によるものによって占められていたのではないだろうか。前二世紀後半代の鏡を共伴しない事実から、南越王墓から出土した彩画鏡C3式・D式を前二〇〇年〜前一五〇年の間の鏡というふうに考えらるならば、南越王は彩画鏡をどのようにして入手したのであるうか。問題はこうした彩画鏡が旧楚領域で生産されていたものか、それとも漢王朝の統制の基に生産されていたかにある。彩画鏡は西安紅廟坡でも発見されており、関中においても存在している。作鏡技術的に華北と華中の系譜が融合したものであるとともに、その面数の

少なさから考えても、漢王朝の統制下に製作された鏡であると考えざるべきであろう。そうであるならば、南越王墓にみられる彩画鏡や帯托鏡は漢王朝からもたらされた特殊な鏡である可能性を考えるべきであろう。これは少なくとも南越と漢の関係が修復した文帝元年以降のことと考えられる。

## 五 彩画鏡を出土する墓

戦国時代後半期に属する彩画鏡A・B式を出土した墓の被葬者について概観してみたい。包山二号墓の墓主は楚官左尹である大夫の邵斡である。<sup>(38)</sup> 彩画鏡B2式が副葬された包山一号墓はこの邵斡の妻の墓と考えられるている。夫の邵斡には二重体鏡二面が副葬されており、そのうち一面は京都国立博物館蔵彩画鏡と文様構成が類似したものである。当時の家父長社会から夫婦の立場を考えれば、二重体鏡の方が彩画鏡より格が上であつた可能性が推定できる。信陽長台関一・二号墓は包山二号墓に比べ小型の墓塚を持つが、槨室が分かれている点や重棺あるいは副葬品の多さから士大夫級の墓と考えられている。<sup>(39)</sup> また墓の築かれた位置や副葬品からは、長台関一号墓の方が長台関二号墓より地位の高い墓主と考えられている。どちらの墓からも彩画鏡が出土しており、彩画鏡B1式が長台関一号墓から、彩画鏡B1・B2式が長台関二号墓から出土している。望山一号墓からは彩画鏡A1式が出土しているが、望山一号墓の墓主は下大夫の身分が推定されている。<sup>(40)</sup> 彩画鏡B式の出土した望山二号墓も同じように下大夫と考えられている。<sup>(41)</sup> 墓葬構造からは決して望山一号墓ほどの身分でない小型墓である望山四号墓からも彩画鏡B1式が出土しているが、望山四号墓は望山一・二号墓を含んだ同じ系統の家族墓と考えられている。<sup>(42)</sup> このように戦国時代の楚国における彩画鏡は、比較的身分の高い大夫級の墓、あるいはその家族墓に埋葬される傾向にある。しかし、江陵九店で彩画鏡が出土した七七・二三四・五一四・五七一号墓は楚系統の墓群と



考えられている墓葬であるが、墓葬構造や副葬品からみた場合、墓群全体の中では中ランクの墓と考えられており、必ずしも階層上位者のみの墓に副葬されるという強い規制はなさそうである。これらの墓は一槨一棺であるところから士人層の墓葬と考えられる。大夫級や士人層の墓に副葬される鏡であることが理解できるが、大夫級の墓からの出土が認められるところからも、戦国鏡全体の中でも、彩画鏡は比較的格の高い鏡という位置づけができるであろう。

一方、統一秦期すなわち前三世紀第四四半期に華北と華中の作鏡体系が融合することにより成立した彩画鏡C式、彩画鏡D式は前二世紀前半期の鏡である。この中で彩画鏡C1式としたものは伝洛陽金村のものであり、金村古墓群は韓墓や東周王朝墓などの比較的社会階層の高い身分の墓主が想定されている墓群である。また、彩画鏡C3式と彩画鏡D式が出土した南越王墓は、南越王第二代趙昧の王墓である。さらに、雲南省晋寧石寨山三号墓からは彩画鏡D式が出土しているが、石寨山三号墓は佞寬司の分類(4)による石寨山文化一期（前三世紀前半紀前葉）の大型墓に相当している。後に「滇王」の金印を下賜される滇王の直接的な系譜を時期的に遡ることができる王墓級の墓といえることができる。彩画鏡A・B式が楚の大夫級の比較階層上位者の墓に伴うものであったのに対し、彩画鏡C・D式は前漢前半期の社会においても階層上位者の墓に伴うことができる。しかも南越王墓、石寨山三号墓、三雲南小路一号甕棺というように、漢王朝における「外臣」である王、あるいは王に相当する地域首長がこの鏡を持つことに歴史的な意味があるであろう。

その点で彩画鏡の格付けが南越王墓内の被葬者間の関係に反映されていることは興味深い。南越王墓は墓室構造が主棺室を中心として西側室、東側室、後蔵室があり、前面には前室とその両側に西耳室、東耳室に分かれている。鏡は東側室で一四面、西側室で一〇面、東耳室で七面、西耳室で六面が出土している。このうち東側室は四人の墓主夫人の部屋であることが、一緒に出土した銅印から判断される。したがってここから出土した一四面

の鏡はこれら夫人のものということができよう。西側室は女性の殉葬者の部屋であり、墓主の奴婢が納められており、ここにあつた一〇面の鏡は墓主の殉葬者に対するものということが言えよう。西耳室からは「帝印」や「昧」といった墓主を指す封泥が九つも発見されている。したがつてこの部屋の副葬品は墓主すなわち南越王趙昧の所有物であるということが考えられるのである。一方、東耳室に関しては封泥などがなく、所有関係の性格は不明といえよう。さてこれらの墓室単位での銅鏡は、枚数的にいえば夫人の所有である東側室が最も多く、ついで奴婢、ついで東耳室、最も少ないのが墓主ということになるが、先に格が高い鏡と考えた彩画鏡は墓主の所有である西耳室から三面でており、夫人の所有はわずか一面である。また、特殊な鏡であり工芸的にも優れた鏡である帯托鏡も、西耳室のみから出土している。こうしてみると鏡の面数というよりは、鏡の質と階層秩序が対応している可能性が考えられる。そこで鏡の鏡式における何らかの階層秩序との関連が想定できるが、彩画鏡や帯托鏡以外では、素文鏡のような簡素な鏡が奴婢の西側室にのみ見られるという傾向は理解できるものの、そのほかでは規則性が認められない。ところでこれら以外の属性として注目すべきは鏡の面径にある。すなわち鏡の大きさという属性要素に注目してみたい。面径を各墓室単位で比較するために、統計処理によく用いられる箱ヒゲ図を使い、墓室単位の面径の相对比较を行えば、図12のように示される。これによつて明確であるように、西耳室が最も面径が大きく、ついで東側室、さらに西側室、最も面径が小さいのが東耳室ということになる。こうしてみると面径は、墓主、墓主夫人、奴婢という階層秩序を明確に反映しているということが言えるのである。西耳室に納められた墓室の所有物は特別な意味合いがあつたと考えられるのである。

こうした鏡の面径を彩画鏡において各型式単位で比較してみたい。同じような統計手法の箱ヒゲ図を使って示せば(図13)、彩画鏡各型式単位でその大きさに違いがあることがわかるであろう。しかも前漢前葉の彩画鏡C式とD式が突然に大型化していることが理解できる。その中でも彩画鏡D式の大きさが突出している。こうした面

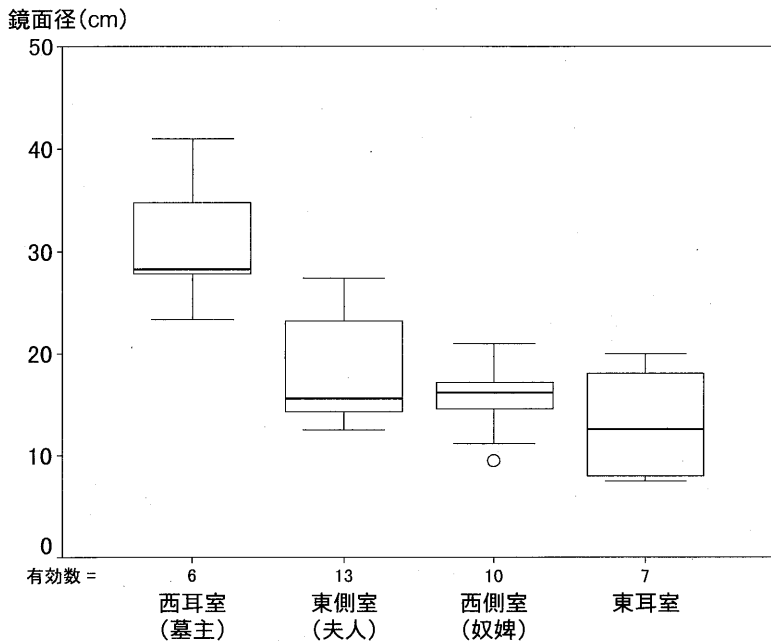
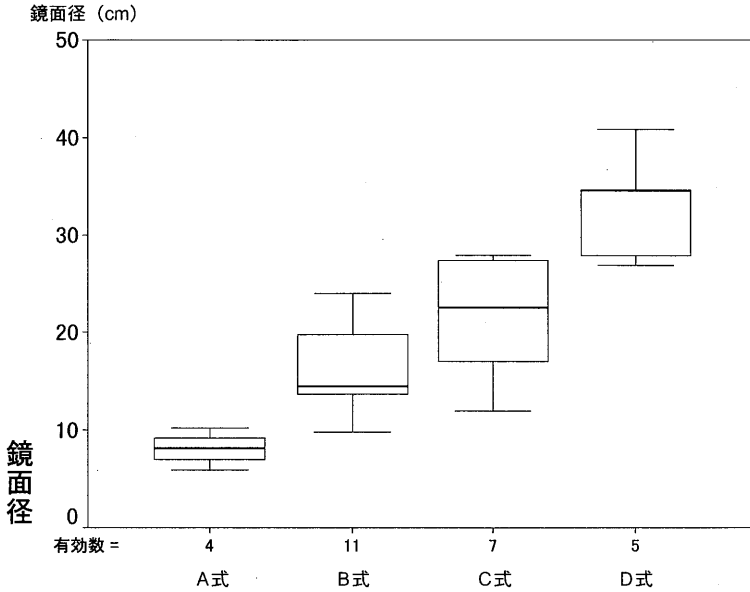


図12 南越王墓出土鏡の墓室別面径比較

径が三〇cm前後ないしは四〇cm以上という突出した大型化の傾向は、前漢に関してみれば、この前漢前葉において異常な傾向として理解できるであろう。大きさという面では帯托鏡がそうである。その中でも、帯托鏡に類似する山東省淄博窩托村出土龍文五紐長方鏡<sup>45</sup>は長さ一一五cm、幅五七・七cmと最も大きなものである。この鏡は龍文が様式的に蟠螭文鏡に類似しており、縁形F類の様式的な特徴からも、前二世紀前半に収まる鏡と考えられる。大きさではないが、先に挙げた徐州宛胸侯墓出土人物画像鏡もこの前二世紀前半に属する鏡であり、彩画鏡と類似した文様意匠をもち、後に鏡の製作が系統的に続かない鏡式である。同じことは伝洛陽金村出土にみられる金銀錯鏡<sup>46</sup>にもいえる。この鏡も同じ時期の鏡と考えられるが、後に作鏡系譜が続かない鏡である。彩画鏡は漢王朝の外臣に認められたが、人物画像鏡の場合、徐州宛胸侯墓出土のように漢王朝の内臣である諸侯がこう



型式

図13 彩画鏡の型式別面径比較

した鏡を好んで用いた可能性がある。彩画鏡、帯托鏡、金銀錯鏡、人物画像鏡という前二世紀前半の単発的に出現する鏡は、戦国鏡の工芸的な系譜を引きながらも、前二世紀後半以降製作されなくなっている。これはどうしたことであろう。これらの鏡を欲したのが漢王朝にとって内臣の諸侯であり、外臣の王や地域首長であった。いわば格付けにおいて必要な鏡であったと想定できるのである。前漢初期の郡国制に於て漢王朝の直接支配する王畿に対し、その外縁に位置する内臣の諸侯、そしてその外縁に存在する外臣がこれらの特殊な鏡を必要としているのである。その鏡が必要なくなる段階は、実年代的に言えば、呉楚七国の乱以降、すなわち漢景帝期以降にあたっている。諸侯、外臣の自立性が削がれた段階にまさに符合している。実質的な漢王朝の中央集権国家体制が始まりつつある段階に符合しているのである。まさにこの特殊な鏡は、こうした中央集権国家体制が生まれる

直前までの漢王朝の混沌とした階層秩序を代弁するものであったのかもしれない。あるいは漢王朝が独立して存在する諸侯や外臣の格付けを示すために製作されたものであるかもしれない。鏡による格付けあるいは鏡による階層秩序は、漢王朝側において必要なものであったのかもしれない。

## 六 おわりに

彩画鏡はその形態や縁形などから大きくAとD式に分けることができ、彩画鏡A・B式は戦国時代後半期、彩画鏡C・D式は前漢初頭の前二世紀前半に製作されたものである。彩画鏡A・B式は戦国時代楚国において前四世紀中葉に生まれたものであり、戦国時代後半期に製作されている。戦国時代前半期を主体とする二重体鏡と彩画鏡の技術基盤は共有関係にあり、その技術系統を引きながら二重体鏡に代わって同一の工房ないし同系統の工房において彩画鏡が製作された可能性が高い。しかもこれらの鏡を所有する墓主は、大夫級あるいは大夫級の家族に相当している。いわば楚国における階層上位者が所有した鏡ということが言えるのである。彩画鏡は戦国鏡においても一種の格付けを有する鏡であったと考えられるのである。

彩画鏡C・D式は、作鏡様式としては華北の作鏡様式と楚の作鏡様式が融合したものであり、前漢初頭の様式的な特徴を示している。しかも鏡面径が急激に大きくなっており、特に彩画鏡D式においては前漢全体をみても極端に大きな鏡として製作されている。また、文様意匠も人物車馬文様を基調とするものが主体であり、こうした文様意匠は楚の漆器文様の流れを引くものであるといえよう。また、白鶴美術館蔵三号鏡のように、彩画文様の意匠が華北の細地文鏡の流れを引くものもあり、華北の作鏡様式と楚の作鏡様式の融合であることを示している。また、出土した墓葬を眺めれば、南越王墓、石寨山三号墓、三雲南小路一号甕棺といふように、漢王朝の外臣

である王や地域首長に認められ、これらの鏡が比較的階層上位者の墓に副葬されていることが理解できるのである。しかも南越王墓の場合、鏡の大きさと、墓主、墓主夫人、奴婢という階層関係と相関している事実が判明し、所有する鏡の大きさが階層秩序を反映していることが理解できるのである。この意味で、前漢前葉に急激に大型化する彩画鏡は、階層における格付けと関係して大型化した可能性が高いであろう。もともと戦国時代の彩画鏡が大夫級の階層上位者の格付けに対応していた鏡であったのが、その流れを引く彩画鏡C・D式段階にさらに大型化することによりより階層関係の格付けの意味を發揮したと考えられるのである。

彩画鏡と同じ人物文様を基本とする画像鏡も前二世紀前半に製作されているが、その墓主が宛胸侯劉執であるように、諸侯級の階層上位者の墓から出土している。このほか帯托鏡や金銀錯鏡は、様式的にみて彩画鏡C・D式と同じ前二世紀前半に製作されたものである。埋葬年代は遅れて前漢中葉の墓であるが、諸侯墓である鱸侯応との関係が考えられる江蘇省漣水三里墩には帯托鏡が埋葬されている。<sup>(4)</sup> 帯托鏡はおそらく戦国時代の楚の二重体鏡の技術的な基盤を継承して製作されたものであるが、これが彩画鏡と同じく階層上位者の墓に埋葬されていることは興味深い。また、彩画鏡C・D式を初めとして帯托鏡や金銀錯鏡などの特殊な鏡はほぼ前一五〇年を境として製作されなくなる。そして次第に草葉文鏡などを介して漢式鏡として収斂していく。では、こうした一連の鏡群がどうして前二世紀前半に突如として盛んに作られ、その後どうして突然製作されなくなったのであろうか。そこには政治的な関連を連想せざるを得ない。すなわち呉楚七国の乱を境として生まれた漢王朝の支配形態の変異が関連していると推測できる。呉楚七国の乱以前はいわゆる郡国制がしかれ、漢帝が直接支配する関中は別として、その外縁の地域は内臣である諸侯によって直接支配されている。例えば画像鏡をもつ宛胸侯劉執はこの段階の諸侯墓である。彩画鏡C・D式は南越王墓、石寨山三号墓に存在する。こうした特異な鏡は漢王朝から配布されたものと考えるべきであろう。実際、彩画鏡D式は西安市紅廟坡から出土しており、彩画鏡が地方産の鏡と

いうことはできないのである。漢王朝が意図して集中的に製作させた鏡と考えるべきであろう。そうであるならば、こうした鏡が階層秩序と関連しているという分析結果は、漢王朝が意図した階層秩序を鏡の格付けによって示そうとしたものに他ならないのである。この時期の特殊な鏡群はこうした階層秩序の位置づけのために漢王朝側から意図して製作されたものと考えられるのである。その意味で、呉楚七国の乱以後の漢による実質的な中央集権的な支配体系の中では、ことさら鏡による階層秩序の意義付けを必要としなかったと考えられるのである。

三五面の鏡が副葬されていた三雲南小路一号甕棺は、彩画鏡C3式以外、主体が異体字銘帯鏡であり、主体の鏡の年代は紀元前一世紀前半のものである。こうした鏡が伊都国の王にもたらされたのは、主体の鏡の製作年代とそう年代を経ないものである。その中に主体の鏡より一世紀近く古い鏡を含めて伊都国にもたらされた契機を考える必要がある。三雲南小路甕棺や須玖岡本D地点墓のように伊都国や奴国の王墓に副葬される鏡は、その鏡の枚数の多さだけでなく、その大きさに意味があることが指摘されてきている<sup>48</sup>。鏡の大きさという意味では南越王墓の階層関係と鏡の大きさが対応していることを指摘した。この場合、こうした鏡の大きさは鏡を受容する側にもともとその意志があつたのか、それとも供給側にその意味を感じていたのかに問題が存在しよう。そうした点から言えば、年代的に古い鏡である彩画鏡C3式を含めて伊都国に送った漢王朝の意図を考えるべきであろう。前漢前葉にみられる外臣に対して漢王朝が大ききにも意味を含めながら彩画鏡を供給した事実<sup>49</sup>は、漢王朝における階層秩序の格付けが存在したと考えなければならぬであろう。呉楚七国の乱以降の安定した社会秩序を形成した武帝代においても、蛮国の地域首長を漢王朝側の階層秩序に応じて遇する必要があつたのである。それが三雲南小路一号甕棺の彩画鏡であつたのである。漢王朝側の鏡の階層秩序が、この後の我が国の鏡による階層秩序の原型をもたらしただけのことのできよう。

本稿を執筆するにあたって様々な便宜を計っていただいた泉屋博古館廣川守氏に感謝致します。また資料の実見や写真の提供に際しては以下の方々のご協力を賜った。記して感謝の意を表します。東京国立博物館 高浜秀・谷豊信、京都国立博物館 難波洋三・宮川禎一、白鶴美術館 中山理、福岡県教育委員会 柳田康雄、九州歴史資料館 横田義章、黒川古文化研究所 西村俊範、明治大学考古学博物館 黒沢浩、出光美術館 弓場紀知、ハーバード大学美術館 Melissa A. Moy、陝西省考古研究所韓釗、西安市文物保護考古所王長君（以上敬称略）。

## 註

- (1) 宮本一夫「戦国鏡の編年」『古代文化』第四二卷第四・六号 一九九〇年
- (2) 廣川守「春秋戦国時代の透彫二重体鏡について」『泉屋博古館紀要』第一四卷 一九九八年
- (3) 福岡県教育委員会『三雲遺蹟 南小路地区編』（福岡県文化財調査報告書）第六九集 一九八五年
- (4) 湖北省文物考古研究所『江陵望山沙塚楚墓』文物出版社 一九九六年
- (5) 湖北省文物考古研究所『江陵九店東周墓』科学出版社 一九九五年
- (6) 黒川古文化研究所『古鏡図鑑』便利堂 一九五一年
- (7) 京都国立博物館難波洋三・宮川禎一氏のご厚意により拝見させていただいた。
- (8) 湖北省荆沙鐵路考古隊『包山楚墓』文物出版社 一九九一年
- (9) 河南省文物研究所『信陽楚墓』文物出版社 一九八六年
- (10) 前掲注8文献
- (11) 前掲注4文献
- (12) 前掲注5文献
- (13) 白鶴美術館山中理氏のご厚意で拝見させていただいた。なお、白鶴美術館蔵の彩画鏡は三面あるが、その番号は本稿において任意に定めたものである。



- (14) 村上英二『開明堂英華』一九九四年
- (15) 宮本一夫「ウインスロップコレクションの戦国鏡」『泉屋博古館紀要』第一七卷 二〇〇〇年
- (16) 後に述べる彩画鏡C1式とC2式は、緑の観察ができないため明確とは言えないが、写真から判断すると縁形は縁E類の可能性  
がある。C1・C2式鏡は縁E類、C3式鏡は縁D2類を特徴とする可能性がある。
- (17) 梅原末治「増訂洛陽金村古墓聚英」小林出版部 一九四四年
- (18) 李学勤・艾蘭「欧州所蔵中国青銅器遺珠」文物出版社 一九九五年
- (19) 中野徹「中国青銅鏡に観る製作の痕跡―製作と形式―」『和泉市久保惣記念美術館・久保惣記念文化財団東洋美術研究所紀要』  
六 一九九四年
- (20) Fogg Museum of Art 1969 Grenville L. Winthrop *Retrospective for a collector*. Cambridge.
- (21) 広州市文物管理委员会・中国社会科学院考古研究所・広東省博物館『西漢南越王墓』文物出版社 一九九一年
- (22) 田澤金吾「人物彩画鏡に就て」『国華』第四九編第五冊 一九三九年
- (23) 李西興「陝西青銅器」陝西人民出版社 一九九四年
- (24) 雲南省博物館「雲南晉寧石寨山古墓群発掘報告」文物出版社 一九五九年
- (25) 出光美術館「出光美術館蔵品図録 中国の工芸」平凡社 一九八九年
- (26) 明治大学考古学博物館「明治大学考古学博物館蔵品図録一」一九八八年
- (27) 湖南省博物館編「湖南出土銅鏡図録」文物出版社 一九六〇年
- (28) 湖北省荆門市博物館「荆門郭店一号楚墓」『文物』一九九七年第七期
- (29) 洛陽文物工作隊「洛陽出土文物集粹」朝華出版社 一九九〇年
- (30) 湖北省荊州地区博物館「江陵馬山一号楚墓」文物出版社 一九八五年
- (31) 前掲注1文献
- (32) 李銀徳・孟強「試論徐州出土西漢早期人物画像鏡」『文物』一九九七年第二期
- (33) 陝西省考古研究所・始皇陵秦俑坑考古発掘隊「秦始皇陵兵马俑坑一号坑発掘報告一九七四―一九八四」文物出版社 一九八八年
- (34) 前掲注1文献

- (35) 前掲注15文献
- (36) 岡村秀典「前漢鏡の編年と様式」『史林』第六七卷第五号 一九八四年
- (37) 全洪「南越国銅鏡論述」『考古学報』一九九八年第三期
- (38) 前掲注8文献
- (39) 前掲注9文献
- (40) 前掲注4文献
- (41) 前掲注4文献
- (42) 前掲注4文献
- (43) 前掲注5文献
- (44) 俵寛司「古式銅鼓の編年と分布―ヘーゲルI式前半期銅鼓の動態と意味―」『日本中国考古学会会報』第五号 一九九五年
- (45) 俵寛司「滇王の権力と系譜―石寨山文化における内部と外部―」『東南アジア考古学会会報』第一八号 一九九八年
- (46) 中国青銅器全集編集委員会編『中国青銅器全集一六 銅鏡』文物出版社 一九九八年  
前掲注17文献
- (47) 南京博物院「江蘇溧水三里墩西漢墓」『考古』一九七三年第二期
- (48) 高倉洋彰「前漢鏡にあらわれた権威の象徴性」『国立歴史民俗博物館研究報告』第五五集 一九九三年
- 岡村秀典「三角縁神獸鏡の時代」吉川弘文館 一九九九年